

1章 男性の属性と子育て参加頻度との関係

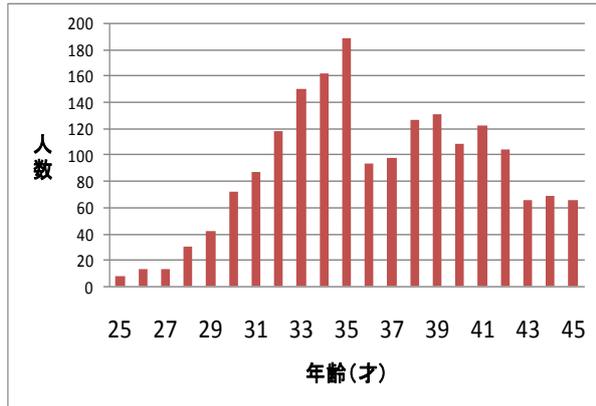
1. 年齢との関係

(1) 年齢の分布と質問項目

対象者の平均年齢は、36.5歳。最も多い人数の年齢は35歳である。(図1-1)。年齢を30歳未満、30代、40代に分けて、子育て参加の頻度を比較した。

図1-1 対象者の年齢分布

子育ては以下の項目について5段階でたずねた。



【未就学児】

1. 子どもの食事の世話をする
2. 子どもと一緒に食事をする
3. 子どもの着替えは身支度の世話をする
4. 子どもの遊び相手になる
5. 子どもと一緒に風呂に入る
6. 子どものオムツやトイレの世話をする
7. 本を読み聞かせる

【就学児】

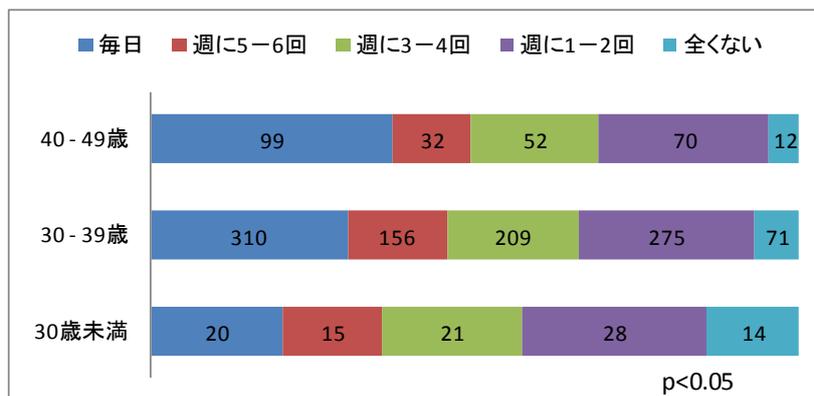
1. 子どもと夕食をとる
2. 一緒に家で遊ぶ
3. 一緒に外で遊ぶ
4. 会話をする
5. 勉強や宿題、習い事の面倒をみる

以上の質問について、[1. 毎日、2. 週に5～6日、3. 週に3～4日、4. 週に1～2日、5. 全くない]の5段階で回答を求めた。

(2) 子育て頻度との関係

未就学児の40歳代の父親は、子どもの食事の世話をする頻度や、子どもと一緒に食事をする頻度が、他の年代よりも多いことが分かった。(図1-2) 未就学児の40歳代の父親では、子どもの

図1-2 年代別子どもと一緒に食事をする頻度



替えの世話も若い年代の父親よりは高かった。また、未就学児の30歳代の父親の頻度が高かった子育ての種類は、オムツやトイレの世話 (p<0.01) や、本の読み聞かせ (p<0.05) であった。20

歳代の未就学児の父親では、子どもをお風呂に入れる（ $p<0.05$ ）頻度が高かった。

就学児の父親では、年齢による特徴は見受けられなかった。年齢による有意な差はなかったが、30歳代の父親は、ほかの年代よりは多少、子育てにかかわる傾向があった。（図1-3、図1-4）

図1-3 年代別子どもと会話をする頻度

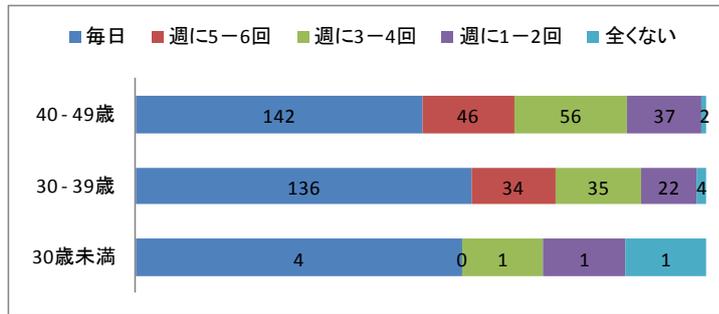
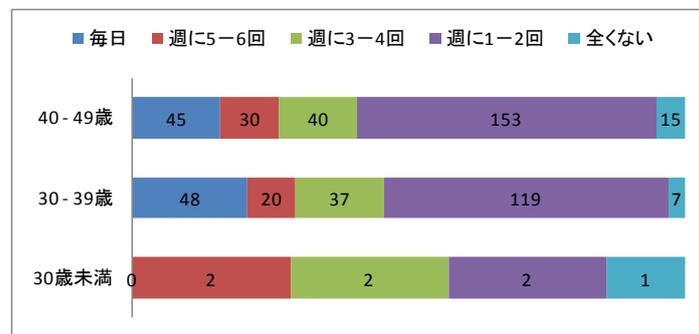


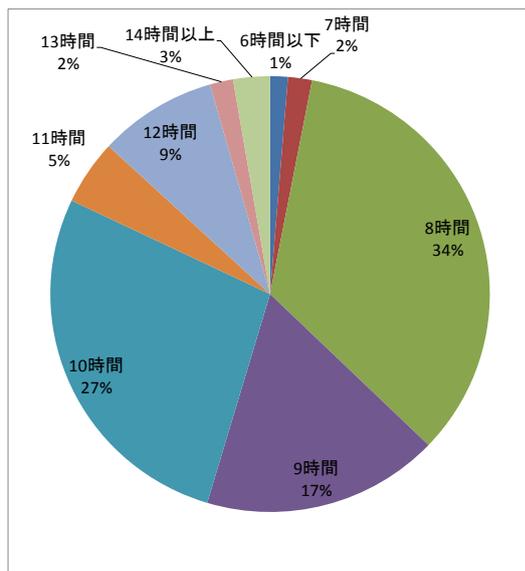
図1-4 年代別子どもと家で過ごす頻度



2. 一日の平均勤務時間との関係

本研究の対象者の一日の平均勤務時間の平均は、9.4時間で、最長18時間だった（図1-5）。勤務時間と子育てとの関係を見ると、概ね、勤務時間が長い夫は、子育て頻度が低いことがわかった。

図1-5 勤務時間



未就学児の父親の子育て頻度と勤務時間との関係には、興味深い特徴がみられた。勤務時間が11時間までは、勤務時間が長いほど、子育て頻度は、低くなるのであるが、11時間を超えると、子育て頻度が増えていく。この傾向は、「子どもの食事の世話をする」(図1-6)「子どもと一緒に食事をする」「子どもの着替えや身支度の世話をする」「子どもの遊び相手になる」「子どもと一緒に風呂に入る」(図1-7)「子どものオムツやトイレの世話をする」「本を読み聞かせる」と、この調査で訪ねた子育て頻度の全項目でみられた。この傾向は、正社員・正職員に限定しても同様であった ($p<.001$)。

図1-6 子どもの食事の世話をする($p<.001$)

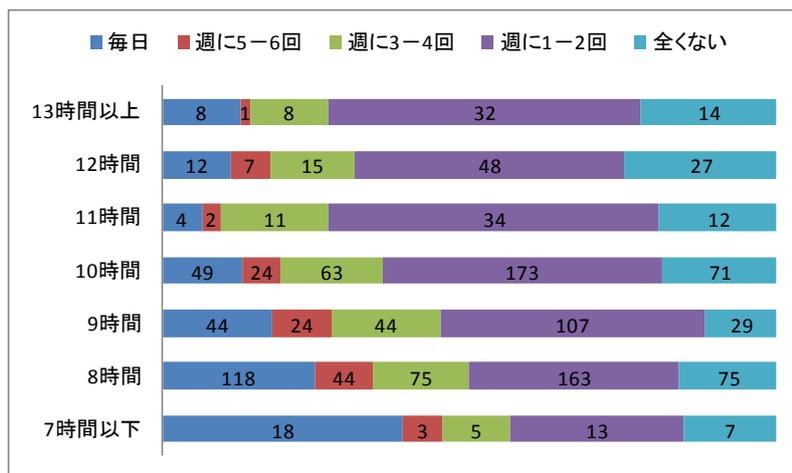
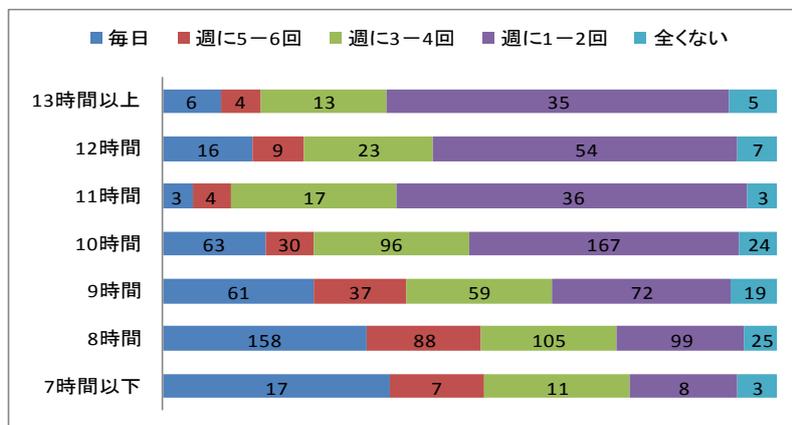


図1-7 子どもと(未就学児)一緒にお風呂に入る($p<.001$)



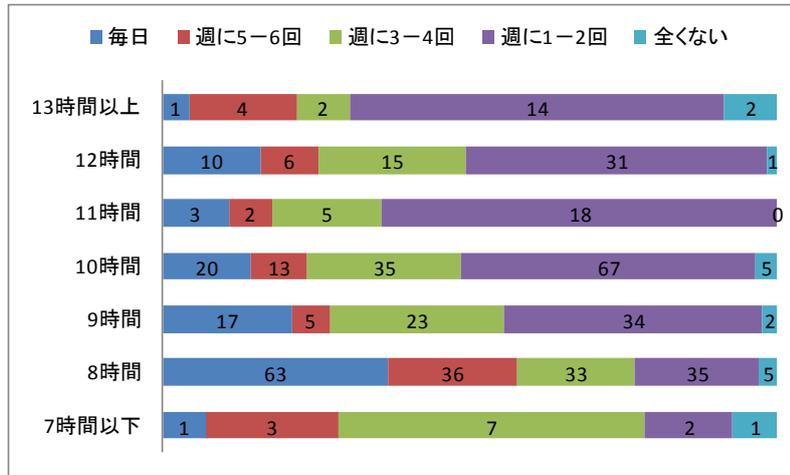
一方で、インタビュー調査で語っている父親がいたが、食事の世話やお風呂に入れるために帰宅した後、再び、仕事に戻る父親もいる可能性もあると考える。

就学児の父親の勤務時間と子育て頻度をみると、未就学児と同じように、概ね11時間勤務までは、長時間になるほど子育て頻度が低くなるという傾向がみられたが、勤務時間が7時間以下の父親の子育て頻度が8時間勤務の父親より低くなっているという特徴があった(図1-7)。

また、図1-8にみられるように「一緒に家の外で遊ぶ」ことが全くないと回答している父親の勤務時間をみると、勤務時間が短くなるほど、外で遊ぶ頻度が少なくなっている。父親が子どもと外で遊ぶのが週に1-2回、すなわち、土日である可能性があることから、7時間以下の父親は

非正規社員（アルバイトやパート）である（ $p<0.1$ ）ので、土日にも勤務があり、わざわざ外出して遊ぶ時間をとれない可能性が考えられる。

図 1-8 子ども（就学児）と夕食をとる($p<.001$)



以上の結果から、父親の長時間労働は、子育ての機会を少なくする要因になっているという現実、現在においても変わっていないことが明らかになった。

3. 通勤時間との関係

本研究の対象者の通勤時間の平均は、44.2分で、もっとも多かった通勤時間は1時間であった。通勤時間と父親の子育て参加頻度の関係を見ると、通勤時間が長い父親は、子育てに参加する頻度は低かった。この傾向は未就学児の父親（図 1-9）、就学児の父親（図 1-10・11）も同様であった。

図 1-9 一緒に家の外で遊ぶ

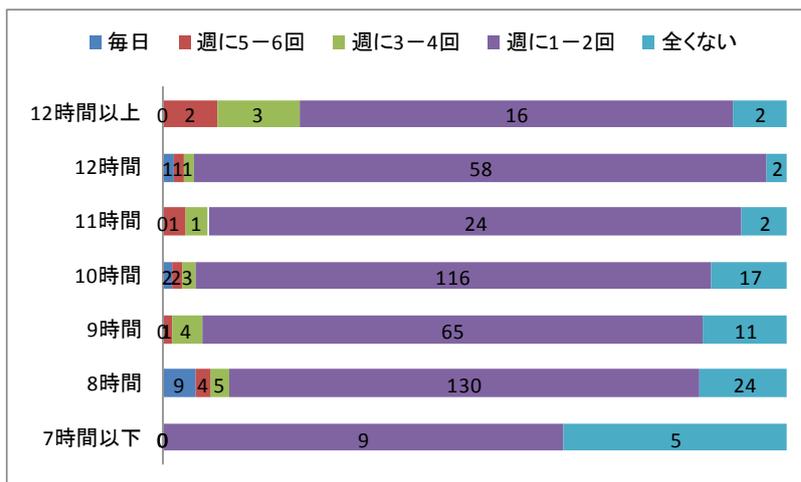


図 1-10 子どもの着替えや身支度の世話をする（未就学児）(p<.001)

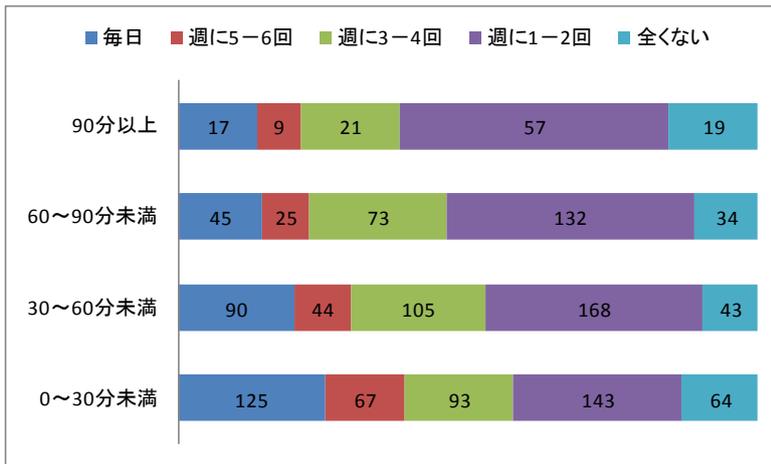
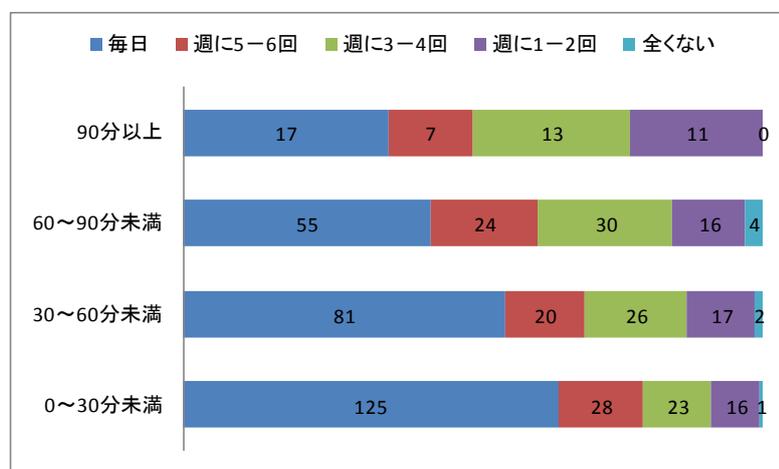
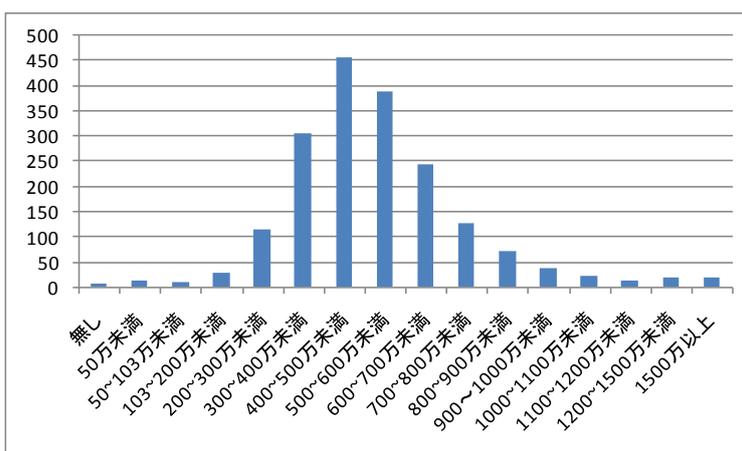


図 1-11 会話をする（就学児）(p<.001)



4. 年収との関係

図 1-12 収入の分布



本調査の対象者の収入の分布は図 1-12 のとおりである。400 万～500 万円が最も多かった。平成 21 年度の全国の男性の平均年収は 499.7 万円なので、全国の傾向とほぼ同じといってよい（『平成 21 年分 民間給与実態統計調査』国税庁 長官官房 企画課、2010 年）。

年収と子育てとの関係の特徴

は、収入の多い父親ほど、子育てへの参加頻度は高かった。（図1-13・14）

図1-13 子どものオムツやトイレの世話をする（未就学児）（ $p<.05$ ）

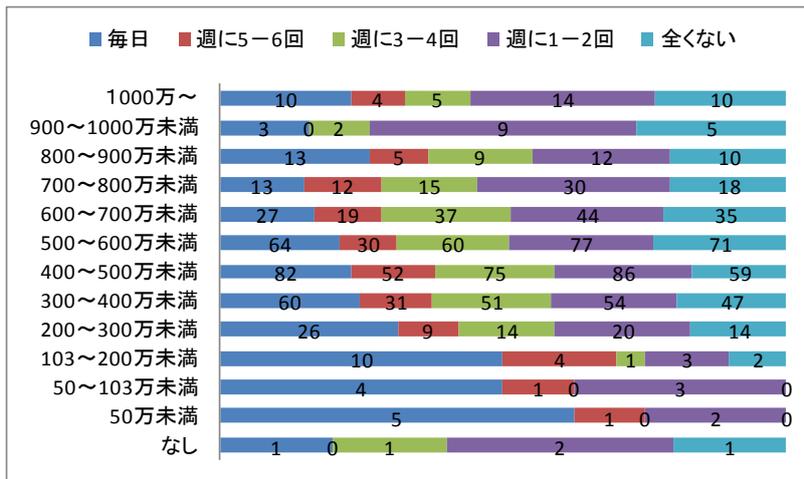
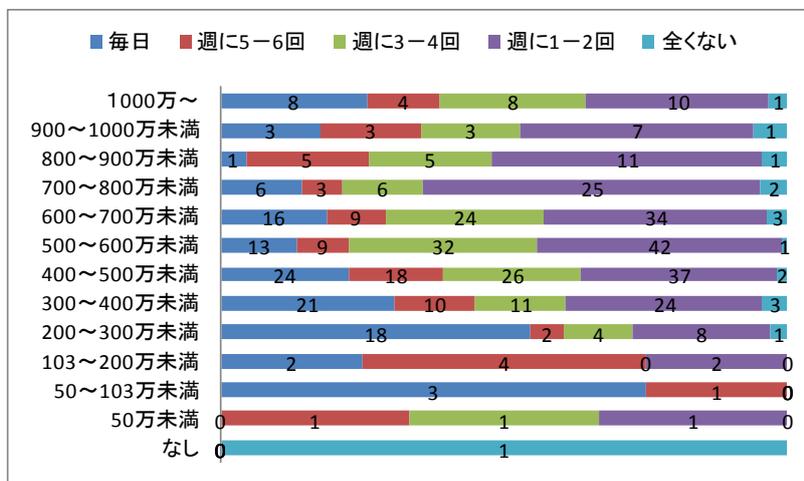


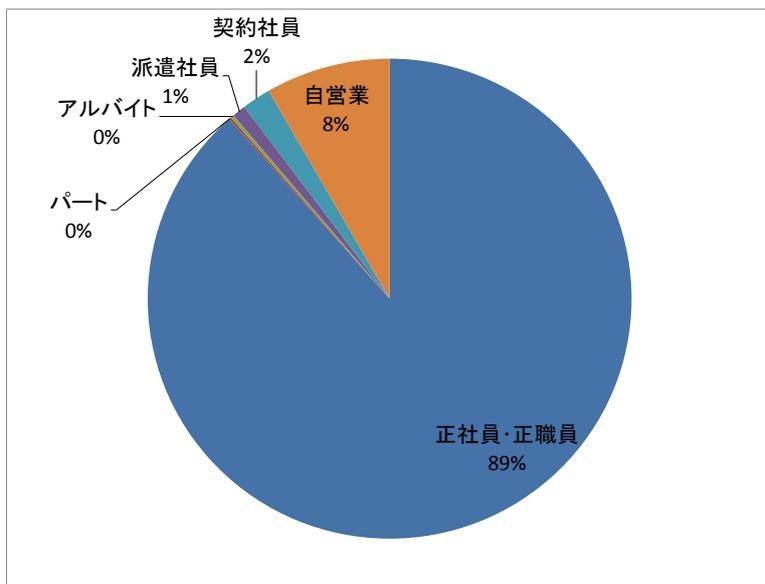
図 1-14 子どもと夕食をとる（就学児）（ $p<.01$ ）

未就学児と就学児の特徴の相違は、50万円未満の父親の子育て参加頻度が少ないことである。



5. 就業上の地位との関係

図 1-15 就業上の地位



本調査の対象者のほとんどの父親は正社員・正職員であった。アルバイトやパートの者は各1名ずつ、派遣社員は6名、契約社員は3名だった。

子育て参加頻度の特徴としては、正社員・正職員は週に1-2回と回答していた。土日に子育てしていることが推測される。

自営業の父親は、子どもと一緒に夕食をとったり、子どもと一緒に家で遊んだりしている割合が多かった。家で仕事をして

いると、おのずと、子どもと接する時間が多くなるのであろう（図 1-16～図 1-18）。

図 1-16 子どもと一緒に食事をする

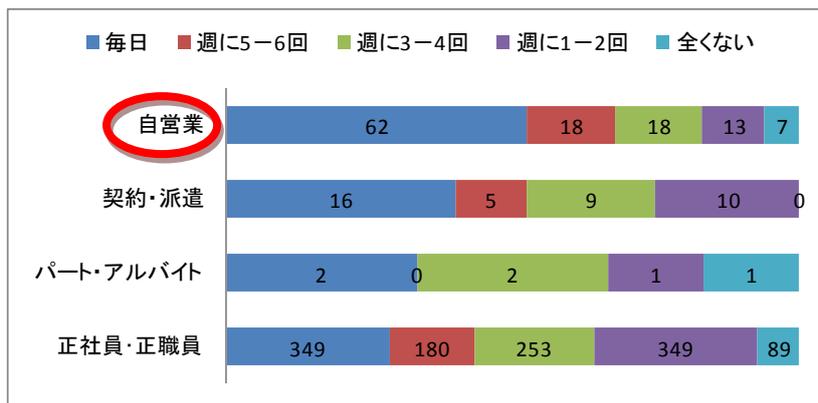


図 1-17 子どもと夕食をとる（就学児）（ $p < .001$ ）

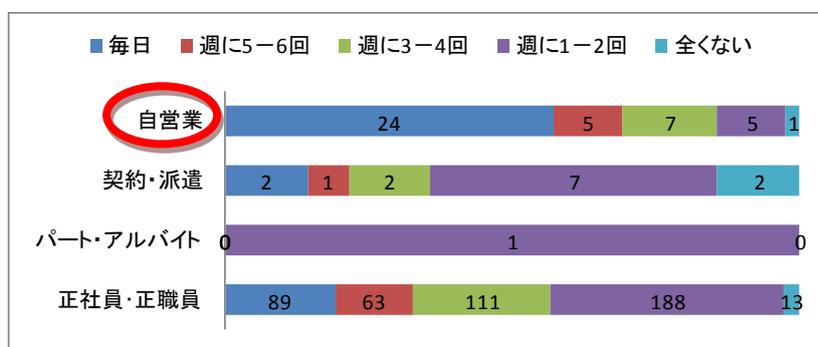
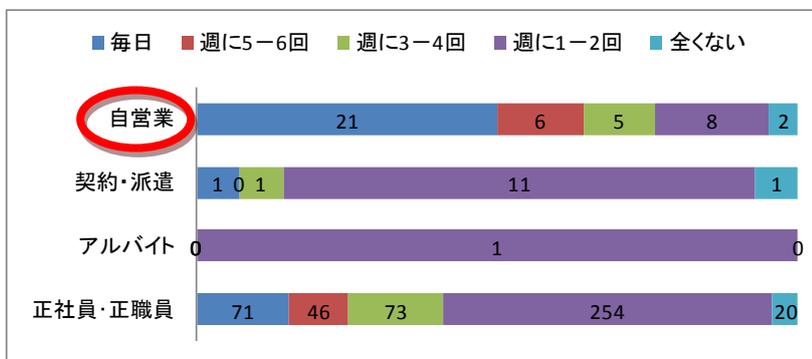
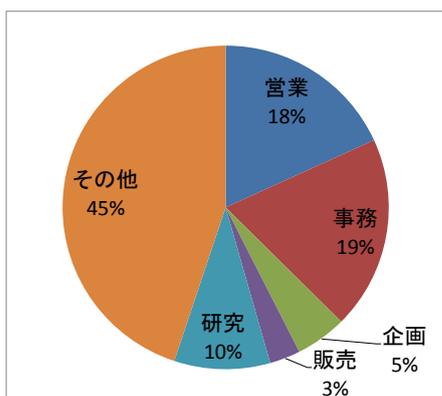


図 1-18 一緒に家で遊ぶ、過ごす（就学児）（ $p < .001$ ）



6. 職種との関係

図 1-19 職種



本調査の対象者の職種は、図 1-19 のとおりである。
 営業と事務と研究職で比較してみると、未就学児では、概ね事務職の父親は、子育て頻度は高い（図 1-20・21）。一方、就学児では、ほとんど差が見られなかった（図 1-22）。就学児の研究職の父親が、「子どもと夕食をとる」頻度が事務職と同じであったことは興味深い。（図 1-23）

図 1-20 子どもの食事の世話をする（未就学児）

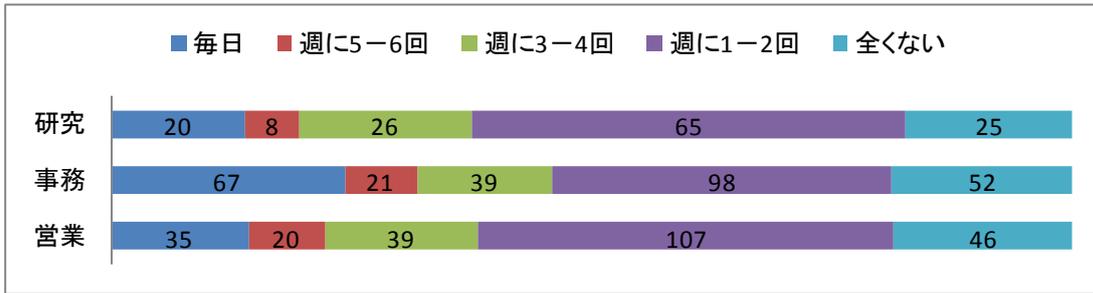


図 1-21 子どもの着替えや身支度の世話をする（未就学児）

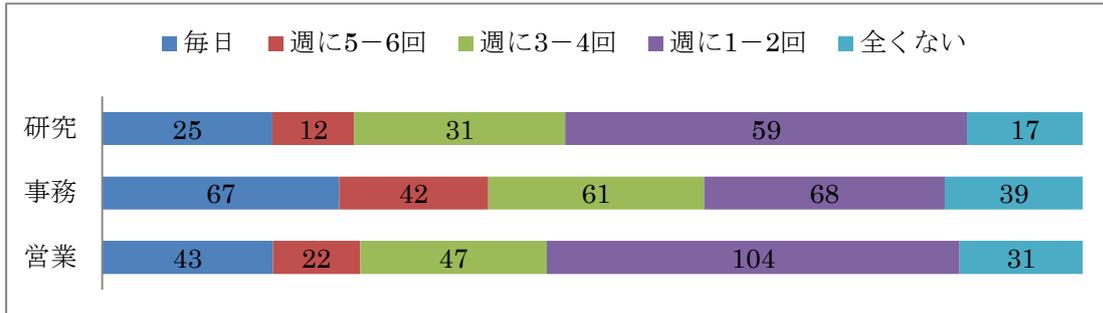


図 1-22 一緒に家で遊ぶ、過ごす（未就学児）

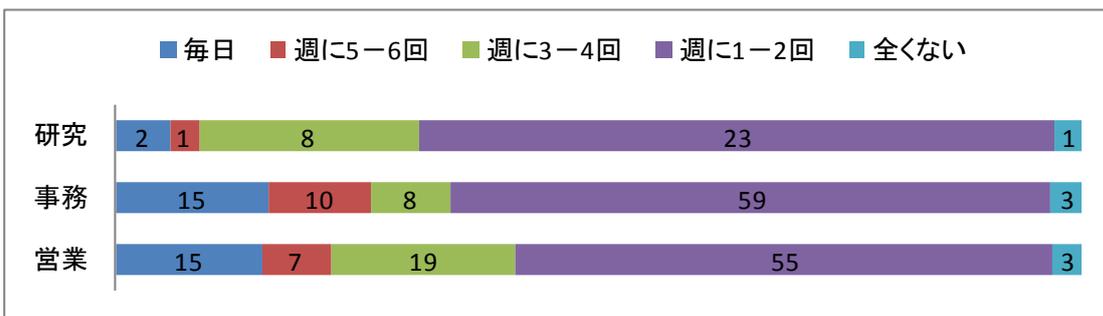
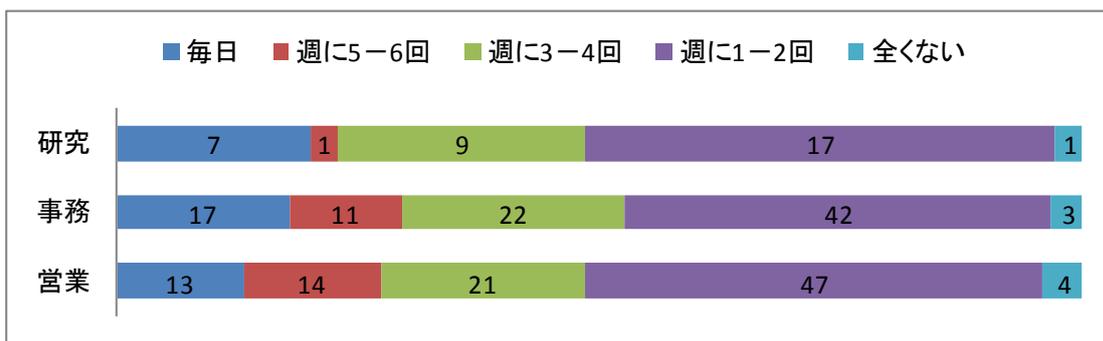


図 1-23 子どもと夕食をとる（就学児）

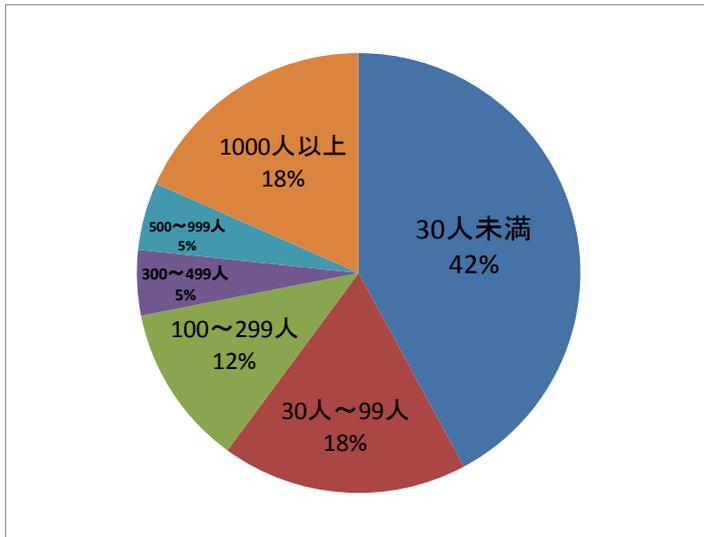


「子どもと夕食をとる」といった帰宅時間に左右される子育て項目については、事務職などのように定時に帰宅しやすい職種や、帰宅時間を自由にできると推測される研究職でやすく、営業などのように、顧客との付き合い等があると推測される職種では、参加頻度は少なくなると考えられる。

7. 企業規模との関係

本調査の対象者が属する企業規模は図 1-24 に示すとおりである。1000 人以上の大企業に勤めている者の割合は 2 割で、100 人未満の小企業に勤務している父親は 6 割であった。

図 1-24 対象者が属する企業の従業員数別割合



企業規模と父親の子育て参加頻度との関係を見ると、子どもと一緒に食事をする頻度（未就学児、就学児）と「一緒に家で遊ぶ、過ごす（ $p<.001$ ）」「会話をする（ $p<.001$ ）」（就学児）頻度は、小規模の企業に勤めている父親のほうが高い。

(図 1-25・26)

図 1-25 子どもと一緒に食事をする（未就学児）（ $p<.001$ ）

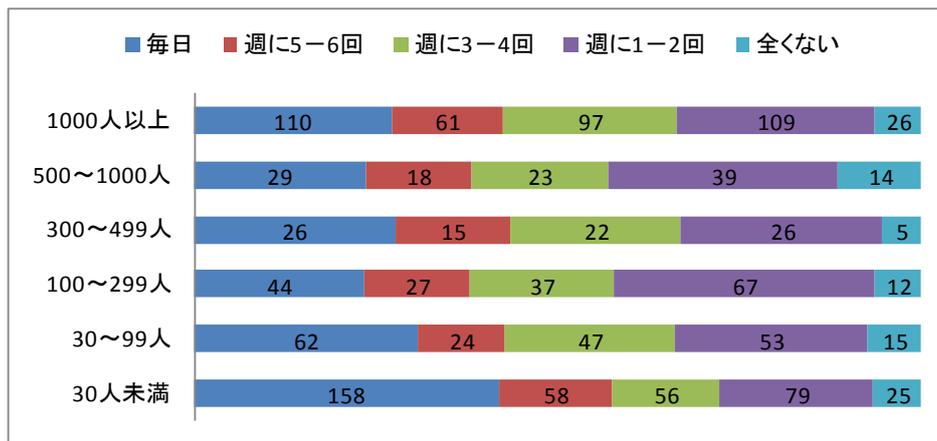
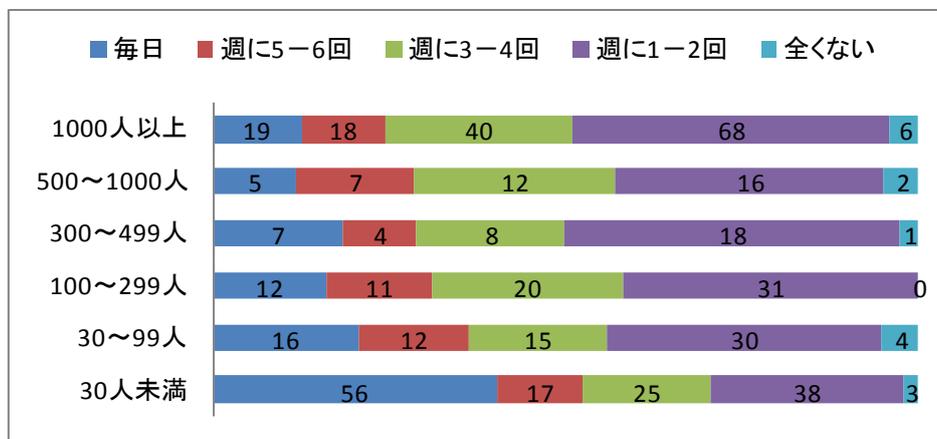


図 1-26 子どもと夕食をとる（就学児）（ $p<.001$ ）



そのほかの子育て項目については、企業の規模による差異は見られなかったが、300 人までの規模の父親の参加頻度は、企業規模が大きくなるほど子育て参加頻度は低くなるが、300 人を超えると、それ以上の規模の企業に勤めている父親の子育て参加頻度の差異がない傾向にあった。
 (図 1-27)

図 1-27 子どものオムツやトイレの世話をする

